HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	土屋 博著「教典になった宗教」
Author(s)	山我, 哲雄
Citation	基督教学, 38, 27-30
Issue Date	2003-06-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46668
Type	other
File Information	38_27-30.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

以降)。

民数記と後続する申命記並びにヨシュア記の対応がモーセ五書全体の成立の問題として取り扱われる。この対応からいえることは、民数記が実際にヨシュア記に続いていたこと、さらに申命記が文献学上独立した文書として認められることである。従ってヨシュア記までを加えて「六書」とする見解もあった。ノートの『伝承史』研究は民数記と申命記並びにヨシュア記の対応を二次的付加と捉え、事実上「四書」とするもので、その後多くの支持を得ているが、他方、今日批判もまた多々存在する。山我氏はこうした多様な批判や修正を類型的にまとめてくれている(四六一―四六二頁)。最後に文書問題の現況をして、モーセ五書成立に関わる問題は議論こそ多かれ、解決にはなお程遠いと結ぶところに文献学者としての良識があらわれている。

著者渾身の労作である。翻訳と脚注に見られる緻密な分析、学問的見識と原文に対する鋭い洞察力に敬意を表する。最後に、書評というより、本書の紹介に終始してしまったことをご寛恕願いたい。

書評

土屋 博著
『教典になった宗教』
(北海道大学図書刊行会)

山我哲雄

本書は、キリスト教の「正典」である新約聖書を「教典論」という宗教学的問題設定の中で扱うという、著者の試みを集成した労作である。著者によれば教典とは、「静的な教義体系を表現するものではなく、むしろ将来に向かって動的に〔宗教集団の〕アイデンティティを作り出すためのきっかけとなる」(七頁、〔 〕内は評者)ものであり、教典論の課題は、「教典に書き記された教説・思想がどのようなものであったかを考察するだけでなく、そのような教説・思想あるいは教典そのものがどのように受容され、実際の宗教生活の中でどのように用いられていったかを明らかにする」(四頁)ことである。

本書で考察の中心になるのは新約聖書であるが、その際にも「聖書のイメージをできるだけ相対化する」（七頁）ことが努められる。本書においてキリスト教が徹頭徹尾一「宗教」として扱われ、「聖」という価値判断を含んだ「聖典」の語が避けられて「教典」の語が用いられるのも、著者のこのような根本的姿勢と方法論的自覚の表れであろう。

全体は三つの部分に分かれており、第一部「宗教学の課題としての教典論」では、本書における教典論の理論的・方法論的基礎付けがなされる。第一章「F・マックス・ミュラーの教典論」では、宗教学の創始者とされ、東方のさまざまな教典にも多大な関心を寄せたミュラーが、同時に「教典の本質は、書き記された教説にあるのでなく、それぞれの教説の差異を超えた共通の根源にあるという認識」に達し、その根源を「無限を認識すると同時に至高の美に向かうような人間の詩的直感」（二五―二六頁）に見ていたことが指摘され、彼の教典論がすでに「文字表現を相対化する」（二七頁）契機を含んでいたと評される。第二章「教典論の復興」と第三章「教典論の射程」では、従来の聖書学の歴史的・批判的方法が、聖書の多様性を明らかにすることを通じて正典としての聖書を相対化する役割を果たしながら、結局は「教団内教典研究」（五八頁）として「自己完結的な護教論」（四九頁）を抜けきれなかったことが批判され、より最近の文芸学的方法や社会学的方法、特にレトリック批評等のうちに「旧来の聖書学の閉鎖的状況を自己批判的に突破していく可能性」（五一頁）が見出されるとともに、「教典を文学的テクストとしてとらえ、これと読者との相互作用を問う」（五四頁）教典論的研究の意義と必要性が主張される。第四章「教典と現代宗教」では、教典の「用い方」の一形態としてのファンダメンタリズムが、キリスト教に止まらず他の諸宗教にも類似現象の見出されるある種の一般性を持った概念であることと、それが「アイデンティティ喪失の危機」感（七一頁）や、グローバルに進行する世俗化とそこから結果する「宗教の個人化」（七八頁）への反動的・集団的反応の一形態であることが指摘される。

第二部「教典論によって照射されたキリスト教史の諸

断面」は、著者の提唱する教典論の立場から新約聖書の諸文書を扱ったもので、いわば本書の中心部分に当たる。第一章「福音書文学と比喩」では、まずルカ福音書のプロローグの詳細な分析から、この福音書が従来言われてきたように歴史記述を意図したものではなく、「想像力によって、出来事を主体的に構成すること」を目ざす「文学」的な性格のものであることが明らかにされる（九六頁）とともに、それが教団の歴史の比較的後期の『教説』の機能が要請されてくる状況に対応して執筆された」可能性が指摘される（九七頁）。次に共観福音書における神の国の「譬」の機能が検討され、それがマルコでは「隠喩的な含み」を持つのに対してマタイでは「直喩に近づいて」おり（一〇五頁）、それがさらにルカになると「範例的機能を担った例話」に変わっていくことが確認され、その背景として、宗教生活の中で関心が神の国の告知そのものから「生き方の模範」へと移っていったことが明らかにされる（一〇八―一〇九頁）。第二章「書簡体文学と模倣」では、以前から著者の研究の主要な対象であった牧会書簡が改めて扱われる。著者によれば、これらの書簡がパウロの偽名を用いるのは「パウロの権威との連続性を主張する」ためであるが、実際にはここでパウロ神学の重要な概念が「一種の『徳』に還元され」ていく（一一四頁）。著者はそこにも、共観福音書の場合と同様、宗教集団の維持発展に伴う「宗教体験の再生産」から「日常性への帰還」へ向けての関心や機能の変化を見る（一一七頁）。第三章「日本における聖書の受容とその機能の変化」では、教典受容ないし「使用」の一例として、主としてわが国の無教会運動における聖書の扱われ方が検討され、教会を持たないこの運動においては書物としての聖書が「集団のアイデンティティを保障するしるし」として「教会のいわば代替物」ないし「儀礼の代替物」になっていく傾向が指摘される（一六八―九頁）とともに、それが新しい生き方や価値観の規範を求めるより一般的な「近代日本社会の潜在的志向」とも合致したものであったと評されている。

第三部「『新約聖書学者』R・ブルトマン再考」は、標題の通り、新約学者であり「神学者」でもあったブルトマンの仕事が教典論の視点から再検討され、特にブル

トマンにおける「宗教」、「神話」、「哲学」、「ケリュグマ」等の概念が、一時期の同僚であったオットーやハイデガーの思想との対比等を通じて、その意義と限界について批判的に検討される。

以上簡単に要約したように、本書における著者の考察は、従来神学や正典研究を背景として営まれてきた聖書研究を宗教学的な教典論の視点から「相対化」しつつ、その枠組みを脱却しようという意欲的な姿勢によって貫かれている。また、そこで行われている問題提起と提唱されている方法論が、さまざまな点で従来の聖書学に方法論的反省を促し、聖書研究の新たな可能性を開くものであることは疑いない。ただし、本書は体系的に書き下されたものではなく、さまざまな機会に発表された論文に手を加えつつまとめたものなので、内容的には多少の偏りと言うか、ある種の粗密の不揃いを感じさせる。例えば、前後にはかなり詳細な方法論的記述と研究史的考察が置かれているが、教典論的視点から実際に新約聖書のテクストを分析する中心部分の第二部は全体の三分の一にすぎないので、全体として序説風の印象はぬぐえない。もちろん、全体が「一貫した問題意識」（二六三頁）を通じてまとまっているとは言えるが、著者自身「おわりに」で認めているように、本書ではパウロの真正な書簡はほとんど扱われていない（二六一頁）。パウロが「教典」を書くなどという自覚も意図もまったくなく、その時々の必要性に応じて特定の名宛人たちに書いたものが、やがて結果的には「教典」の一部となり、時代も状況も異にする宗教集団によって「用いられ」ていくようになるという事態は、教典論的考察の有効な対象になるにちがいない。また、元来の著者の意図を離れた「用いられ方」という点に対しては、（カルト的使用法をも含めて）「ヨハネ黙示録」ほど興味深い対象はないであろう。これらの点をも含めて、著者の研究のさらなる発展を大いに期待して止まない。